様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １４ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2018
課題番号：１５Ｋ０２３９３

研究課題名（和文）ジャック・デリダにおける「自伝」の脱構築

研究課題名（英文）The Deconstruction of the "Autobiography" in Jacques Derrida

研究代表者
郷原　佳以（Gohara, Kai）

東京大学・大学院総合文化研究科・准教授

研究者番号：９０５２９６８７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：デリダにおける「自伝の脱構築」のありようを明らかにするという目的に沿って、主として以下の研究を行った。
（１）デリダがテクストに虚構的かつ単独的な動物たちを登場させ、虚構的かつ自伝的なテクストを書いたのは、他者性における単独性と普遍性のアポリアを限界まで思考するためであったことを明らかにした。
（２）デリダにおける自伝的・詩的テクストの展開と晩年まで続いた「灰」モチーフとの関連を精査し、両者に大いなる関係があることを突き止めた。『火ここになき灰』、「送る言葉」、「プラトンのパルマケイアー」を精査することで、「灰」モチーフの登場がデリダにおける自伝的・詩的テクストの端緒を徴づけていることを示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
哲学者ジャック・デリダの著作を自伝的要素や記憶、「灰」といったモチーフに注目して1960年代から晩年まで検討することにより、デリダが著作に虚構的および自伝的要素をちりばめたのは、一方で、哲学的言語の形而上学的性格を批判し、新たな哲学的言語を探求しつつ、他方で、「私」の反映としての「自伝」の捉え方を批判し、「自伝の脱構築」を行うためであることを示した。また、デリダの著述の「語り」の性格を追究することによって、哲学的なデリダ研究における欠落を補うことができた。

研究成果の概要（英文）：In the purpose of demonstrating the “deconstruction of the autobiography” in Jacques Derrida, I carried out principally these researches: (1) Demonstrating that Derrida has written fictional and autobiographical texts with fictional and singular animals to think radically the aporia of the alterity between the singular other and the general other.(2) Finding out the relation between the development of the autobiographical and the poetic text and the theme of the “cinder” in Derrida. In examining Feu la cendre, "L’Envoi", "La pharmacie de Platon", I demonstrated that the appearance of the theme of the cinder marked the beginning of the autobiographical and the poetic text in Derrida.

研究分野：フランス文学

キーワード：ジャック・デリダ　自伝　脱構築

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

哲学者ジャック・デリダ（1930－2004）は膨大な著作を残したが、1977 年から 1979 年にかけて外国から親しい相手に向けて書かれた書簡という形式を取った「送る言葉」（1980）以降、自伝的な要素を著作にちりばめるようになった。その要素は徐々に前景化し、1990 年代以降にはアルジェリアで過ごした幼年時代のことも積極的に語るようになった。他方、「自伝」、とりわけ「哲学者の自伝」は、デリダが繰り返し考察の対象とした主題でもある。1990 年代前半のデリダは「証言」をセミネールの主題に据え、ブランショの自伝的物語などを分析した。1997 年の講演「動物ゆえにわれ動物である＝動物を追う」では、アウグスティヌスからルソーに至る「告白」の系譜のうちにデカルトの哲学を位置づけるという試みが行われている。デリダにおけるこの二つの試みは軌を一にする。しかしながら、この両者の間にある密接な関係は従来見逃されており、哲学研究においては、デリダにおける記憶や証言の問題の重要性やその複雑な理路が認識されていながら、デリダ自身の自伝的記述にはそれが読み込まれず、素朴なものと捉えられてきた。しかし、デリダのエクリチュール論に鑑みれば、デリダにおける自伝素は、それが「私の生」の記述である限り、現実の生きた書き手である「私」の反映を保証するものではない。

デリダ研究の以上のような状況ゆえに、デリダにおける「自伝」の再検討とデリダ自身の自伝的著作とを絡めて分析し、デリダにおける「自伝」の脱構築のありようを明らかにする必要があった。

２．研究の目的

（１）デリダの自伝的テクストと自伝論の双方を関連づけて精査することによって、デリダが、一方で、哲学的言語の形而上学的性格を批判し、新たな哲学的言語を探求しつつ、他方で、「私」の反映としての「自伝」の捉え方を批判し、「自伝の脱構築」を行ったことを示すこと。

（２）この二方向の探究により、哲学的なデリダ研究が見落としてきた論点を補うこと。すなわち、第一に、デリダの著述の「語り」の性格を解明することができる。第二に、「自伝」をめぐるデリダの思想を抽出することによって、デリダ後期における動物論への接近の真の射程を明らかにすることができる。

３．研究の方法

（１）従来必ずしも自伝論として読まれてこなかったデリダのさまざまな著作を広義の自伝論という観点から読み直し、デリダの著作活動の流れのなかに位置づけること。

（２）1970 年代から晩年にまで至るデリダの自伝的要素のちりばめられた著作を分析し、それらの要素の意義を解明すること。

（３）デリダの自伝的テクストと広義の自伝論の関連づけにより、デリダが新たな哲学的言語を探求しつつ「自伝の脱構築」を行ったことを検証すること。

４．研究成果

（１）前年度の研究成果「L’enfant que donc je suis、あるいは、猫のエピソードはなぜ「自伝的」なのか」の問題意識を引き継ぎ、デリダの 1990 年の講演『死を与える』から 1997 年の上記講演までを射程に入れ、さらに、キルケゴールやレヴィナスの他者論、シャルリ・エブド事件や東日本大震災をめぐる状況も参照しつつ、デリダがテクストに虚構的かつ単独的な動物たちを登場させ、虚構的かつ自伝的なテクストを書いたのは、「他者性」における〈単独性＝近い他者〉と〈普遍性＝遠い他者〉のアポリアを限界まで思考するためであったことを明らかにした（「近い他者 遠い他者――デリダと文学的想像力」）。

さらに、この点を含む、デリダの脱構築における「文学的想像力」について、連載の形で考察を開始した（「デリダの文学的想像力」（１）～（３））。

また、理論的テクストに虚構的要素を読み込むデリダのテクスト読解と蓮實重彦のフィクション論との間に共通性を見出す考察を行った（「理論のフィクション性、あるいは、「デリダ派」蓮實重彦」）。

（２）デリダにおける自伝的・詩的テクストの展開と晩年まで続いた「灰」モチーフとの関連を精査し、両者に大いなる関係があることを突き止めた。まず、自伝的テクストのうち「灰」が最初に明示的にテーマとなった『火ここになき灰』（1980）のなかにアメリカの TV ドラマ《ミッション：インポッシブル》への暗示が現れることに着目し、その起因として、自伝的・虚構的テクスト「送る言葉」（1977－79、『絵葉書』）および「プラトンのパルマケイアー」（1968、『散種』）末尾において、《ミッション：インポッシブル》と類似要素をもつプラトン「第二書簡」への重要な参照が見られることを指摘した。その関連を読み解くことで、「灰」モチーフの登場がデリダにおける自伝的・詩的テクストの端緒をしるしづけていることを示した（「デリダにおける《ミッション：インポッシブル》――灰、自伝、エクリチュール」、« La mémoire et la/là cendre – Généalogie de la Deuxième lettre chez Derrida »）。

さらに、デリダの「灰」モチーフと記憶や記録、その複製や喪失との関係について考察を深めた（「指呼詞を折り襲ねる――『怪物君』の歩行」、「『ミッション：インポッシブル ローグ・ネイション』――「僕がメモリだ」 メモリをめぐる「除籍者」たちの闘い」）。

（３）1990 年前後からのデリダにおける宗教的なものの主題化と自らのユダヤ性に触れる自伝的テクストの増加および「ユダヤ的なもの」への言及との並行的な関係について精査し、デリダが西洋そして全世界に深く根づいたユダヤ・キリスト教的な「供犠のエコノミー」を問題視していることを示すと共に、晩年のデリダが自らを「最後のユダヤ人（もっともユダヤ人的ではないユダヤ人）」として指し示したことの理由を明らかにした（「デリダはなぜ自らを「最後のユダヤ人」として提示したのか――あるいは、キリスト教的エコノミーをいかにかわすか」）。また、同様のキリスト教的論理の問題視が晩年の死刑論講義のひとつの大きな軸であることを検証した（「ダイモーンを黙らせないために――デリダにおける「アリバイなき」死刑論の探求」）。

（４）デリダの著作の自伝的・詩的性格と関係が深く、デリダ論も含んでいるブリュノ・クレマンのプロソポペイア（活喩法）論『垂直の声』の翻訳を刊行すると共に、デリダらのプロソポペイアに関する考察を行った（「他なる声、他なる生、比喩形象」）。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 8 件）
（１）郷原佳以「デリダの文学的想像力２　「私は書く」の現前性から「私は死んでいる」の可能性へ――バルト、バンヴェニスト、デリダ１」『みすず』2018 年 12 月号（677 号）、30－39 頁。査読無し。
（２）郷原佳以「デリダの文学的想像力１　脱構築は「文学的」テクスト読解である」『みすず』2018 年 10 月号（675 号）、10－18 頁。査読無し。
（３）郷原佳以「『ミッション：インポッシブル　ローグ・ネイション』――「僕がメモリだ」メモリをめぐる「除籍者」たちの闘い」『現代思想 総特集 現代を生きるための映像ガイド』2018 年 3 月臨時増刊号、180－183 頁。査読無し。
（４）Kai Gohara, « Le chant des Sirènes et la « voix narrative » – le mythe, la voix et le récit », *Cahiers Maurice Blanchot 5*, Hiver 2017-2018, Les presses du réel, p. 70-83. 査読無し。
（５）郷原佳以「指呼詞を折り襲ねる――『怪物君』の歩行」『三田文學』2018 年冬号（132 号）、慶應義塾大学出版会、2018 年 1 月、190－207 頁。査読無し。
（６）郷原佳以「理論のフィクション性、あるいは、「デリダ派」蓮實重彦」『ユリイカ　総特集　蓮實重彦』2017 年 10 月臨時増刊号、370－383 頁。査読無し。
（７）郷原佳以「デリダにおける《ミッション：インポッシブル》――灰、自伝、エクリチュール」『言語・情報・テクスト』第 23 巻、東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻、2016 年 12 月発行、41－60 頁。査読無し。
https://repository.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/?action=repository_uri&item_id=39258&file_id=19&file_no=1
（８）郷原佳以「近い他者 遠い他者――デリダと文学的想像力」『早稲田文学』2015 年夏号（通巻 1014 号）、2015 年 5 月、38－51 頁。査読無し。

〔学会発表〕（計 15 件）
（１）郷原佳以「哲学的言説の隘路――亀井大輔『デリダ 歴史の思考』について」、亀井大輔『デリダ 歴史の思考』合評会、2019 年 3 月 16 日、立命館大学衣笠キャンパス末松記念館第三会議室。
（２）郷原佳以「『終わりなき対話』第 3 部における叙事詩としての文学」、バタイユ・ブランショ研究会、2018 年 6 月 2 日、獨協大学西棟 W425 教室。
（３）Kai Gohara, « La mémoire et la/là cendre – Généalogie de la Deuxième lettre chez Derrida », 6th Derrida Today Conference, 24-5-2018, Concordia University (Montreal, Canada).
（４）郷原佳以「非－主題としての動物――村上克尚『動物の声、他者の声』合評会、2018 年 2 月 17 日、日本大学文理学部本館 2 階会議室 A、。
（５）郷原佳以「ラスコーと「永遠の誕生」」、日本フランス語フランス文学会秋季大会ワークショップ「ラスコーの曙光から」、2017 年 10 月 29 日、名古屋大学 C22 教室、。
（６）郷原佳以「ダイモーンを黙らせないために――デリダにおける「アリバイなき」死刑論の探求」、シンポジウム「デリダと死刑を考える」、2017 年 10 月 7 日、慶應義塾大学日吉キャンパス来往舎 2 階大会議室。
（７）郷原佳以「デリダはなぜ自らを「最後のユダヤ人」として提示したのか――あるいは、キリスト教的エコノミーをいかにかわすか」、シンポジウム「デリダと宗教的なもの」第一部「赦すことと信じること」、2017 年 7 月 15 日、慶應義塾大学三田キャンパス東館 8 階ホール。
（８）郷原佳以「「忘れがちの記憶」、吉増剛造」、シンポジウム「カタストロフィと詩――吉増剛造の「仕事」から出発して」、2017 年 3 月 11 日、成蹊大学 10 号館 2 階大会議室。
（９）郷原佳以「「毒をもって毒を制する」療法的思想」、竹峰義和『救済のメーディウム』合

評会、2017 年 1 月 26 日、東京大学駒場キャンパス 18 号館コラボレーションルーム 1。
（１０）郷原佳以「喪をめぐる 2 つのファンタスム――最晩年のセミネールと過去の著作」、ワークショップ「ジャック・デリダ『獣と主権者Ⅱ』を読む」、2016 年 7 月 30 日、東京大学駒場キャンパス 18 号館コラボレーションルーム 1。
（１１）郷原佳以「デリダにおける《Mission Impossible》――自伝の脱構築論に向けて」、フランス語・イタリア語部会談話会、2016 年 6 月 30 日、東京大学駒場キャンパス 18 号館 6 階ラウンジ。
（１２）郷原佳以「ブリュノ・クレマン講演へのコメント」、ブリュノ・クレマン来日講演、2016 年 4 月 18 日、日仏会館 1 階ホール。
（１３）Kai Gohara, « Critique et traducteur – la passion du « tout » et de l' « entre » », Journée d'étude « French Theory au Japon », 19-3-2016, Collège International de la Philosophie, Maision Heinrich Heine, Grande Salle.
（１４）Kai Gohara, "On Gisèle Berkman's *L'Effet Bartleby, philosophes lecteurs*", UTCP Workshop Bartleby revisited, 17-12-2015, 東京大学駒場キャンパス 101 号館 2 階研修室。
（１５）郷原佳以「「言語が足りない」ときにどうするか――シミュラークルの必要性とその様態」、バタイユ・ブランショ研究会（大森晋輔『ピエール・クロソウスキー』合評会）、2015 年 5 月 30 日、明治学院大学。

〔図書〕（計 4 件）
（１）高桑和巳、鵜飼哲、郷原佳以、江島泰子、梅田孝太、増田一夫、郷原佳以、石塚伸一『デリダと死刑を考える』白水社、2018 年、270 頁（169－203 頁）。
（２）岩野卓司、合田正人、郷原佳以、坂本尚志、澤田直、藤田尚志、増田一夫、宮崎裕助『共にあることの哲学と現実――家族・社会・文学・政治』書肆心水、2017 年、320 頁（187－226 頁）。
（３）塚本昌則、鈴木雅雄、郷原佳以、他『声と文学　拡張する身体の誘惑』平凡社、2017 年、590 頁（74－102 頁）。
（４）ブリュノ・クレマン、郷原佳以訳・解題『垂直の声　プロソポペイア試論』水声社、2016 年、376 頁（335－365 頁）。

〔産業財産権〕
○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
（１）郷原佳以「『終わりなきデリダ』書評」『フランス哲学・思想研究』第 22 号、日仏哲学会、2017 年 9 月、293－297 頁。
（２）郷原佳以「書くことと赦しを求めること　シクスーによるデリダ」『ふらんす〈特集　ジャック・デリダ〉』2015 年 11 月号、白水社、17－18 頁。
（３）郷原佳以「手紙とアーカイヴの思想家の伝記（ブノワ・ペータース『デリダ伝』書評）」『図書新聞』2015 年 4 月 4 日号（第 3201 号）1 面。
（４）郷原佳以ホームページ
http://detruireditelle.g1.xrea.com/kai.htm

６．研究組織

(1)研究分担者　なし

(2)研究協力者　なし

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。